

むかしむかし 昔々の そお市

郷土を知る

社会教育課 文化財係 ☎ 099-482-5958

第26回

たかやまひこくろう
高山彦九郎が見た

230年前の末吉

晴天の中、彦九郎は財部麓を出発、都城へ続く街道から正ヶ峯、柳井谷を通過、高岡筋（現国道10号線）を横切り国原、高井田経由で、都城、末吉間の松並木通り（現国道269号線）に入ります。そして大淀川（現森田橋付近）で身を清めてから末吉麓の地頭仮屋（現末吉中学校）を尋ねています。

その目的は、神話に関する史跡の訪問にあったようで、仮屋番所の有馬善右衛門（郷土年寄）や堀井戸兵衛から情報を収集しています。また、

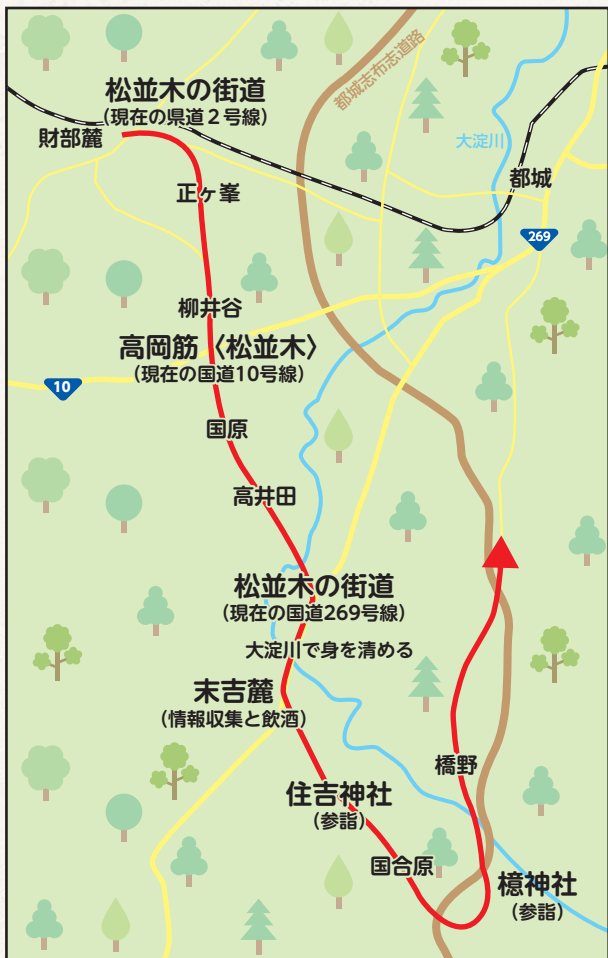
江

戸時代後期の勤皇思想家である高山彦九郎正之は、上野国（現在の群馬県）出身で、林子平・蒲生君平と共に、「寛政の三奇人（奇人とは、立派な人物の意）」の一人に数えられています。彦九郎は、勤皇論（天皇に忠義を尽くすこと）を説いて全国を巡り、その思想は、吉田松陰など幕末の志士達に多大な影響を与えたといえます。

彦九郎は、数多くの日記を残しており、その一つ『筑紫日記』を読むと、当時の末吉の様子が浮かび上がってきます。

寛政四（一七九二）年六月四日、

【1792年6月4日 彦九郎が通った大まかなルート】



町の酒屋で焼酎を飲みながら一句詠み、店主に贈っています。

その後、ほろ酔い？の彦九郎は、住吉神社を参詣、社司の高橋伊膳や馬場助七親苗（郷土横目）らと交流しています。次に、国合原経由で檜神社を参詣、小戸池・中津瀬・磐根子（当時、猫の姿をした岩と思われていた）などの神代の旧跡について学んでいます。

ほかにも南之郷の史跡・桜谷（第24回のコラム欄で紹介）や平松城跡（肝付氏の史跡とあり）のことも聞き記しています。

目的を達成した彦九郎は、橋野か

ら嫁坂、梅北経由で都城へ向かっていきました。

この記述は、今からちょうど230年前のことで、末吉麓の様子や当時の人々が各史跡をどういう風に考えていたのかを今によく伝えてくれています。

彦九郎と末吉郷土の馬場助七は、短い時間ながらも意気投合したようで、別れを惜しむ歌を交わし合っています。

今とはとて別る、袖を引留て又もあふへき縁にしをそ思ふ 助七

縁にしありて又もあふなんと斗に思へは思へは名残惜しけれ 彦九郎